

Japanse vereniging
voor de studie van

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

Vereinigung
für die Studien

第9号

2024年11月

association japonaise
d'études belges

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第9号
2024年11月



第4回「ベルギー学」シンポジウムの記録

開催要項

主 題	響きあうベルギーと日本——ベルギーの音楽をめぐる学際的研究——
日時/会場	2023 年 12 月 15 日 (金) 駐日ベルギー王国大使館 (招待制) 12 月 16 日 (土) 上智大学四谷キャンパス 10 号講堂
主 催	第4回「ベルギー学」シンポジウム実行委員会、上智大学ヨーロッパ研究所
共 催	日本ベルギー学会、ベルギー研究会
協 力	駐日ベルギー王国大使館
後 援	ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁 (WBI)、日本・ベルギー協会、日本イザイ協会、国際交流基金
助 成	一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団

プログラム

2023 年 12 月 15 日 (金) オープニングイベント

記念講演

日白音楽交流——2 人のベルギー人イエズス会士を中心に——

川野祐二 (エリザベト音楽大学学長)

オープニングコンサート

ウジェーヌ・オーギュスト・イザイ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第5 番

加藤綾子 (ヴァイオリン)

諸井誠：歌曲集「子供の国」より 4.ぶらんこ 5.お使い 6.赤い風船

ジャン・アブシル：歌曲集「優雅な時間」より 1. 雷雨 2. 白い協会 3. 太陽

薬師寺典子 (歌)・守田絢子 (ピアノ)

一柳慧：ピアノ・メディア (1972)

飯野明日香 (ピアノ)

アンリ・ヴェータン：言葉のない3つのロマンス 作品7 1 愛の歌 2. 失望 3. 思い出

甲斐摩耶 (ヴァイオリン)・垣内敦 (ピアノ)

2023 年 12 月 16 日 (土)

基調講演

作曲家、音楽史家としての F.-J. フェティス——オペラ=コミック《双子姉妹》、装置としての音楽史、そしてベルギー

友利修 (国立音楽大学)

Eugène Ysaÿe Rediscovered

Marie CORNAZ (Royal Library of Belgium)

研究発表

J. -Th. ラドゥーの『古謡集』を巡るベルギーの国民／民族音楽

大迫知佳子 (広島文化学園大学、ブリュッセル自由大学)

The Sounds of Euro Coins: Is Music Part of Belgium's Public Image?

Alexis D'HAUTCOURT (Kansai Gaidai University)

内野三葉子（ベルギー王立カリヨン学校「ジェフ・デニン」）
ワロン地方、及びフランドル地方におけるベルギーのヒップホップミュージック——そのシーンの特徴と相違点の考察

友利修 (国立音楽大学)・安川智子 (北里大学)・岩本和子 (神戸大学)

演：平賀僚太・三浦梓・新福美咲・盛合匠・田村智仁郎・近野桂介・中安義雄

第4回「ベルギー学」シンポジウム
The 4th Symposium for Japan Studies

響きあう
ベルギーと日本

ベルギーの音楽をめぐる学際的研究
Resonance: Belatis/s between Belgium and Japan
Interdisciplinary Studies on Music in Belgium

日 時： 2023年12月18日（土）13:00~18:30（223A 第4場）
O R T： 1C10 December 2023

会 場： 上野大学各会館キャンパス「10号館」
〒102-8554 東京都千代田区根岸2-1-7-1
L I C E N S E： CC BY-NC-SA (https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/)

ア ク セ ス： JR有明線、新大塚駅13分／有明線、南大塚駅
徒歩5分 御町口・赤塚口から徒歩5分

H O S T S： 日中文化交流協会、ベルギー・日本文化振興会
ベルギー大使館、ベルギー駐日大使館、ベルギー文化振興会

主 催： 第4回「ベルギー学」シンポジウム実行委員会
上野大学 ユニバーシティ

O R G A N I Z E R S： Executive Committee for the 4th Symposium for
Belgian Studies
Belgian Institute Sophia University

WebSite
<https://www.jbjsympc.org>



2024 年

第 99 回研究会

日時 2024 年 9 月 21 日 (土) 13:00-17:30

会場 拓殖大学文京キャンパス D 館 601 教室 & オンライン (Zoom)

【発表】 武居一正「6 月 9 日の選挙結果とそれ以降の連立樹立の動きについて」

【発表】 平岡洋子「西洋美術史研究について」

【映画鑑賞】『女だけの都 (La Kermesse héroïque)』(ジャック・フェデー監督、フランス、1935 年、109 分)

映画紹介：吹田映子

6 月 9 日の選挙結果とそれ以降の連立樹立の動きについて

武居一正 (福岡大学)

実は欧州および地域圏議会との同日選でしたが、この報告は、連邦 (下院) の選挙結果に着目して進めます。

さて、選挙結果は明白で、勝者と敗者が分かりやすかったですね。多くの人は「中道右派政権」が最も結果に合致するものと思いました。私も X でそのようにつぶやきました。だから、N-VA の Bart De Wever が、国王により組閣者に任命されました。

組閣も従来とは異なりそこそこスムーズに進むものと思われましたが、声をかけられた 5 党の優先政策の違いや思惑が絡まり、特に財政再建政策がネックで上手く行きませんでした。彼は連立協議のベースになる note を何度も修正しましたが、最終的に MR に拒否されて De Wever は一度匙を投げました (組閣者辞任)。

国王の命による Les Engagés 党首の Prévot の調停の結果、De Wever は再び組閣者に任命され

ました。従って、Arizona 連立と De Wever 首相はなお多くの可能性があります。恐らくこれ以外の代替案がありません。現在、彼は連立協議のベースになる基本政策の note を念入りに作成中です。ただ、最初の note の中には、各党が反対しないテーマも多々あり、各テーマごとの作業グループの作業が平行して続けられています。

このような現在のベルギー内政のメインテーマである連邦政府樹立の動きについて、3 つの「逆転」という視点から分析したいと思います。

西洋美術史研究について

平岡洋子 (宮崎看護専門学校)

それぞれの専門分野に研究やその発表について特別な事情があると思いますが、15, 16 世紀のフランドル絵画を専門に見てきた私が、狭い範囲で見知ったことから、いくつか感想を述べたいと思います。それはそうではないとか、それはこういう事情なのだとか教えてくださいと助かります。

日本で西洋美術をやるうえで、気が付いたことが 3 点ほどあります。

- 1, 研究とは
 - 2, 外国の大学で、博士論文をかくということ
 - 3, 日本で発表すること、ヨーロッパで発表すること
- こういう話をする場が美術史学会などではないところから、ベルギー研究会でお話しさせていただくことになりました。



第 98 回研究会

日時 2024 年 6 月 8 日 (土) 13:00-17:00

会場 大阪公立大学文化交流センター小セミナー室 & オンライン (Zoom)

【発表】 大迫知佳子「近代ヴラーンデレン音楽考——J. ブロックスと民謡の関係を中心に」

【共同発表】「世紀末ベルギーとパリの芸術・ジャーナリズムの関係」

辻昌子「1890 年代のパリのジャーナリズム——ジャン・ロランとベルギーの芸術家たち」

白田由樹「1890 年代ベルギーの新聞・雑誌メディアと前衛芸術派におけるフランスへの意識——ジャン・ロランの記事とアンリ・ド・グルーの発言がひき起こした波紋の背景」

【論文紹介】 小川秀樹「オランダ東インド会社 VOC の投資者・運営者に関する研究 (前)・(後)」 「ファン・ゴッホの家系分析から見えるもの」

近代ヴラーンデレン音楽考——J. ブロックスと民謡の関係を中心に

大迫知佳子 (エリザベト音楽大学)

J. ブロックス (1851-1912) は、近代ヴラーンデレン楽派の確立を目指した P. ブノワ (1834-1901) の後継者として、ヴラーンデレン・オペラを創始した作曲家と位置付けられている (アーセンス 1994: 568-569 等)。ただしブロックスは、「人種の精神」、すなわち、「ヴラーンデレンの言語と歴史」を敷衍した音楽の必要性を説いたブノワとは異なり、ヴラーンデレンの歴史を題材としたオペラ作品をヴラーンデレン・フランスの両言語で制作した。彼の作品は「神秘主義的」あるいは「現実主義的」等と形容され (Solvey 1920: 31 等)、ベルギー・ヴラーンデレン地方のみならず、ワロン地方、そして、フランス、ドイツ、イギリス等で高い評価を受けることとなる。この時、ブロックスが母語の代わりに、いわば「人種の精神」を表すために用いた手法の一つが、民謡の引用であった。

本報告は、ブロックスが民謡そのものを扱った《我が祖国》および「フランデレン民俗舞曲集」の分析から、ブロックスのオペラ作品に「フランデレンらしさ」を与えたであろうフランデレン民謡が持つ、その「らしさ」が、言語の他にどこにあるのか、ということへの示唆を得ようとするものである。

1890 年代のパリのジャーナリズム——ジャン・ロランとベルギーの芸術家たち

辻昌子 (大阪公立大学)

1890 年代のパリにおいて最も人気があったジャーナリストのひとりであるジャン・ロランが新聞メディア上に掲載するテキストは、連載小説やコント、ヌーヴェルなどのフィクション作品と、美術批評記事やサ

ロン報告、社交会のゴシップ記事、犯罪記事などがジャンルの垣根なく互いに混ざり合い、新聞という「総合的な言説の場」を読むという行為の面白さを提供している。とりわけ美術批評において、フィクションの要素を交えつつ、連続する様々なジャンルの記事を寄稿することによって新しい芸術家たちを紹介する手法は、通常的美術批評記事よりも一般大衆への普及効果が高いとして、アンソールはロランの記事を高く評価している。しかし、ロランの記事はパリで人気を得るための有力な手段のひとつとみなされる一方で、スキャンダラスな言説によって注目を集めるという、現代の「炎上商法」にも近い過激な性質の記事は、一部の芸術家たちを遠ざける原因にもなった。本発表ではロランが記事で取り上げたベルギーの芸術家たち——トゥーロップ、アンソール、クノップフ、アンリ・ド・グルーらの例をもとに、彼らがどのようにパリのメディアに紹介されていたか、その一端を明らかにしたい。

1890 年代ベルギーの新聞・雑誌メディアと前衛芸術派におけるフランスへの意識——ジャン・ロランの記事とアンリ・ド・グルーの発言がひき起こした波紋の背景

白田由樹 (大阪公立大学)

辻報告をベルギー側から補完するものとして、ジャン・ロランが 1897 年 10 月にフランスの『ジュルナル』紙上で取り上げたアンリ・ド・グルーの「ベルギー嫌い」の発言が、ベルギーの新聞でどう報道されたのか、また、なぜそれがスキャンダルとなったのかについて検証を試みる。この時期、自由美学のメンバーやそこに関係する芸術家たちは、イギリスの『ステュディオ』やフランスの『芸術と装飾』誌に寄稿し、ベルギーの「新しい芸術」を報道や批評として発信していた。その反面、ベルギーの前衛芸術派の一部では自国に対する一種の

倦厭感が語られ、それがボードレーの「哀れなベルギー」などフランスで書かれたネガティブなベルギー像と結びついたことが、同年の『現代芸術』誌に掲載された「ベルギー嫌悪」と題される記事などにもうかがわれる。『ソワール』紙の記者は、ド・グルーの発言に絡めたロランの記事について、才人気取りのパリ人が常套的におこなうベルギーいじりだと批判する。つまり、ロランが主にフランスの読者に向けて書いた悪ふざけ記事はベルギー側のコンプレックスを刺激し、そこに利用されたド・グルーは不名誉を被ったということになるだろう。こうした出来事は、ベルギーの芸術家たちの間で、ロランの筆に対する警戒心が広がる要因になったと考えられる。

1. オランダ東インド会社 VOC の投資者・運営者に関する研究 (前)・(後)

2. ファン・ゴッホの家系分析から見えてくるもの

小川秀樹 (成蹊大学)

1. 「VOC 論文」(『成蹊法学』第 99 号、2023 年 12 月)

世界初の株式会社と言われるオランダ東インド会社 VOC は、これまでアントウェルペン等からの移住商人たちの資金が助けとなって 1602 年に設立されたと言われてきた。投資者の内訳の分析が無いわけではない

が、人口移動の激しい時代、フランドルからの移住民の定義すら困難である。本研究では、先駆会社の投資者 (1600 年に日本に來航したリーフデ号のロッテルダム会社を含む)、6 ケ所のカーメル (支部) の役員、派遣船団の司令官、バタヴィアの VOC 総督、平戸・出島の商館長等の出自を直接に個別調査、フランドル系が単に VOC 投資だけでなく、自らアジアの海に漕ぎ出した、アジア貿易のフランドル系独占の実態を解明した。

2. 「ゴッホ論文」(『成蹊大学一般研究報告』第 54 巻、2024 年)

オランダ人画家ゴッホは、画家生活の多くをフランスで送った他、弟テオへの有名な手紙等でも多くフランス語を用いたことは知られている。また人生の岐路の時期をベルギーで過ごしている (ブリュッセル二回、アントウェルペン)。本研究はゴッホの家系調査に加え (ワロン教会のメンバーも)、子供の頃の教育・読書、牧師を目指した時期の行動、フランス時代の画家仲間等々の調査から、ゴッホがいかに関係する人びとのなかで多く過ごしたかを分析、一族のルーツとされるドイツのオランダ国境の町「Goch」をさらに超え、元々はフランドル地方からの宗教移民の家系である可能性を示唆した。

第 97 回研究会

日時 2024 年 3 月 8 日 (金) 14:00-17:45

会場 ブリュッセル自由大学 (ULB) Campus Solbosch

【発表】 中條健志「移民ミュージアム「MMM」の活動とその目的」

【発表】 吹田映子「フランス・マゼレールの作品と生涯」

【発表】 後藤加奈子「幕末明治期の開港地横浜における外国人社会とベルギー人——「ジャパン・パンチ」に見られる「ベルギーいじり」について」

移民ミュージアム「MMM」の活動とその目的

中條健志 (東海大学)

本発表では、2019 年 10 月 12 日にモレンバークに開館した移民ミュージアム MigratieMuseumMigration (以下、MMM) の活動と目的を、同館の理念、設立の経緯および所蔵品の分析をつうじて明らかにする。そこでは、発表者がこれまでに調査をおこなったフランス語圏の移民ミュージアム二館、すなわちフランスの国立移民史博物館 (以下、MHI) とルクセンブルクの移住資料セ

ンター (以下、CDMH) を比較材料として提示する。

ブリュッセルにおける移民労働者の歴史をテーマとしたミュージアムであるが、そこでは通史的というよりもむしろ、移民の個人史に焦点があてられた研究がおこなわれている。これは、国立の施設として創設された MHI (2007 年開館) の方向性に近いが、市民団体のイニシアティヴによってつくられた MMM は、市民参加によって運営されているという点では CDMH (1993 年開館) に近い活動形態をもっている。

これら二館からみると後発となる MMM が、その活動と目的にどのような特徴と課題があるのかを示したい。

フランス・マゼレールの作品と生涯

吹田映子（自治医科大学）

フランス・マゼレール (Frans Masereel, 1889-1972) はブランケンベルヘで生まれ、ヘントで教育を受けた版画家である。第一次世界大戦が勃発して以降スイスに次いでフランスを居住地とし、没後ヘントに埋葬されるまで母国に定住することがなかったため、ベルギーの芸術家としてはあまり認知されていない。反戦・平和運動の担い手でもあった彼の活動はドイツをも拠点に加えた国際的なもので、木版画を中心とする彼の作品は存命中ヨーロッパだけでなくソ連や中国でも展示され、画集や挿絵本は世界各地で求められた。こうした出版物を介して彼の作品は戦前の日本でも一部の左翼知識人の間で人気だったが、弾圧の強化に伴って認知の機運は潰えてしまった。それでもロマン・ロランの小説『ジャン・クリストフ』の挿絵を通してマゼレールの作品に触れている人は少なくない。本発表ではマゼレールがどのような人物で、どのような作品を生み出したのかを改めて整理し、彼の全体像に迫りたい。

幕末明治期の開港地横浜における外国人社会とベルギー人——「ジャパン・パンチ」に見られる「ベルギーいじり」について

後藤加奈子（リエージュ大学）

「ジャパン・パンチ」は、英国人画家ワグマンが開

港場・横浜で 1862 年から 25 年間、断続的に発行した風刺画雑誌である。

「パンチ」が愛読されていた環境は外国人居留地 foreign settlement と呼ばれ、主に外交官や商人たちが行き交う特殊な地域だった。

「パンチ」では、対日政策をめくりフランス、ドイツ、ロシアなどが頻繁に茶化されており、ベルギー関連のジョークと解釈できる風刺画も見受けられる。

「パンチ」に収められた絵やテキストの総数が 2500 頁分であると概算すると、これまでに調査できた中で、合計 30 頁分に当たる枚数がいわゆる「ベルギーいじり」に費やされていることがわかった。本発表では、「パンチ」内の「ベルギーいじり」に注目し、1867 年から 1884 年頃までの「横浜のベルギー人」の描かれ方を観察するとともに、公文書とは異なる視点から当時の息吹を伝える風刺画の在り方についても考えたい。



オランダ語の子どもの本こぼれ話(3)*

野坂悦子

2024 年の 3 月後半、アントウェルペンにある「翻訳者の家 Vertalershuis」⁽¹⁾に滞在しています。ここは、「フランドル文学基金 Literatuur Vlaanderen」⁽²⁾が運営する宿泊施設です。同名の施設はオランダのアムステルダムにもありますが、オランダ語圏だけが特別というわけではなく、RECIT(欧州文芸翻訳センターネットワーク)のサイト⁽³⁾を見ると、ヨーロッパ約 50 か所に、様々な言語の翻訳者のための施設があることがわかります。

前回のベルギー訪問は 2019 年 11 月。国際交流基金の助成を受けた「紙芝居文化の会欧州デモンストレーションワークショップ」⁽⁴⁾の一環として、市の中心的な図書館である「ペルメーケ図書館 Bibliotheek Permeke」⁽⁵⁾で紙芝居講座を開くためでした。このときは、紙芝居文化の会運営委員 5 名でアントワープを訪れました。

今回はひとり、翻訳作業に集中して過ごす夢を抱いてきたのですが、現実には、読書推進組織や図書館を訪問したり、作家、紙芝居の関係者と会って話をしたりと、ひまさえあればどこかへ出かけています。今日はそんな日々から、フランドル地域の子どもの本と紙芝居の動きを実況中継しましょう。

到着翌日の 3 月 21 日。懐かしのペルメーケ図書館を再訪すると、入口の横に置かれた巨大な装置が目を引きました。こ、これは……音楽自転車？ 正面のポスターに「3 月は青少年読書月間、スポーツとゲーム」(Jeugdboekmaand, Sports&Spel)⁽⁶⁾と書かれています。なるほど、見慣れぬ装置は今月の活動のシンボルで、自転車(スポーツ)で音楽を鳴らす遊び、というわけです。

エントランスホールの中央には、ボクシングのリングまで用意されていて、目をこすっていると、スタッフが笑いながら「いつもとは違うのよ」と、声をかけてくれました。

週末には、リング上で子どもたちが即興の詩を読み上げ、みんなの前で勝負するイベントがあるのだ

そうです。英語で slams と呼ばれるこのイベントは、日本では「詩のボクシング」と呼ばれています。とはいえ、日本の公共図書館でリングを見かけたことはなく、感心するやら驚くやら。

子ども向けのイベントカレンダーの年齢区分が、下は 0 歳-3 歳から始まり、上は 15 歳-25 歳までとなっているのも興味深い点です。それは語学力を遅れて身につける移民や難民の若者も対象にしているから。中華街に近いこの地域には 60 以上の国から来た人たちが住んでいるそうで、「スポーツとゲーム」をテーマに選書され展示された本に目が行くまゝに、ルーツの異なる人たちへのきめ細かな配慮を強く感じました。

ペルメーケ図書館は、以前から紙芝居への関心が高く、ベルギーやオランダで出版された紙芝居を数多く所蔵、舞台の貸し出しも行っています(ただし紙芝居、舞台ともに日本より一回り大きいサイズです)。

5 年前と同じく、紙芝居の担当者とアポを取ってくれたのはインゲ・ウマンスさん⁽⁷⁾。新任の図書館員ロッテ・ヴァン・デ・ウェルフさんも日本の紙芝居文化に興味を示し、「毎月一度、オランダ語と、もうひとつ別の言語で、"バベルファベル"⁽⁸⁾という紙芝居イベントを行っています。3 月は日本語とオランダ語にしましょう」と、すぐに提案がありました。インゲさんによれば、最近はファミリー向けの多言語のイベントで、絵本に加えて紙芝居を使う図書館が増えているのだそうです。

ベルギーで、50 年以上の歴史を持つ「青少年読書月間」。その旗振り役は、非営利組織「だれもが読書 Iedereen Leest」⁽⁹⁾(旧名「読書財団 Stichting Lezen」)です。読書と読書推進に関する情報機関として、大人も対象にした読書週間、ブックスタート、読書審査団などのプログラムやキャンペーンを展開。フランドル地域とブリュッセル首都圏地域における読書文化を育んでいます。財政的には、前述のフランドル

文学基金が支えています。

「スポーツとゲーム」にテーマに選んだ理由について、子ども向けのサイトには「スポーツは体にいいし、遊ぶことも健康にいい——つまり読書と同じだよ！ 本を読んですぐに筋肉が強くなるわけじゃないけれど、頭と心を動かすきっかけになるんだ」等の説明がありました。

いっぽう子どもに関わる大人向けのサイトには、「動きが言語の授業のサポートになる」という研究者 Gert Muylle の説⁽¹⁰⁾から、「音読される絵本を体育の授業に生かすことができるし、逆に動きのあるひとときは国語の授業のよいサポートになる」「抽象的な概念や感情を身体で体験することで、非常に具体的になる」といったキーフレーズが引用されています。そして子どもたちが体を動かすことを通して、物語の内容や語彙、登場人物の感情を内面化させ、より長く記憶できるようにしてはどうかと、絵本『グラフィロ もりでいちばんつよいのは？』⁽¹¹⁾などを例に、いくつか具体的な活動も提案されていました。

ペルメーケ図書館のあと、私は「だれもが読書」の本部を訪れ、話を伺いました。「だれもが読書」の本部は、2023 年よりフランドル文学基金と同じ歴史的建物⁽¹³⁾の中に移っています。以下、エヴァ・デヴォス (Eva Devos) さんへのインタビューです。エヴァさんは、同組織内に置かれた「IBBY フランドル支部」⁽¹²⁾の代表も兼ね、海外への情報発信の役割を担っている方です。

Q「9 年前に、「読書財団」から現在の名称に組織名が変わったそうですが、仕事の内容も変わりましたか？」

A「以前は催事企画が多かったけれど、今は子どもに関わる人たちへの教育コースが増えていて、オンラインも大いに活用しています。図書館で働く人が児童文学を学ぶための三日間コースもあれば、ブックスタートと関連するコースもあります。多言語の中で育つ乳幼児にどう対応するか、というコースもあるんですよ」⁽¹⁴⁾

Q「ベルギーの図書館は多言語を取り入れることに積極的ですね？」

A「ええ、この二十年間でルーツの違う人達の数

とても増え、図書館には先駆けの役割があるんです。(フランドル地域の)学校はオランダ語での教育を基本にしているため、フランス語、ドイツ語以外の多言語教育にはやや消極的なので……」

Q「難民センターで暮らす子どもたちも、ふつうに学校へ通っているのですか？」

A「はい、ただ中等教育からは OKAN⁽¹⁵⁾というシステムがあります。これは外国語を母語にする新来者のための受け入れ教育のことで、期限は 1 年。ベルギーまたはオランダ以外の国籍を持ち、オランダ語を十分に話せない 12-18 歳の子どものために特別に設けられたものです。先生が科目によって変わることはなく、常に受け持ちの先生だけ。オランダ語の勉強を通して、人間的な絆を作ります。先生は子どもたちが経験してきた戦争のこともよく理解していて、無神経な質問はせず、たとえ居眠りしていても見守ります。そして 1 年間で、その子にこれからどんなクラスが合うか見定めるのです」

エヴァさんには実は 2 人、アフガニスタン出身の息子さんがいます。上の子は 22 歳のとき、下の子は 19 歳のときに養子にしました。下の息子さんは、スウェーデンで高等教育を終えたあとベルギーに来たそうですが、この OKAN の話に特に熱がこもっていたのは、個人的な思いもあるからでしょう。

インゲ・ウマンスさんにも、エチオピア出身のお子さんがいるそうで、かわいい写真を見せてくれました。社会情勢を反映して、多様な家族の形を描いた絵本が、ベルギーを始めとする EU 諸国や米国、カナダ、オーストラリアでは次々出版されていますが、それは必要不可欠なものだからです。日本でも最近、少しずつ翻訳出版されるようになっているのは喜ばしいことです。

3 月 30 日には、「物語の織り手 De Verhalenweverij」⁽¹⁶⁾の代表、ヒット・スマンス (Gitt Smans) さんとお会いする予定です。この団体は、難民センターを定期的に訪れて、紙芝居を演じたり、本を届けたりして、子どもたちの物語作りを手伝うボランティア活動を、2017 年から続けています。IBBY オランダ支部では、IBBY 朝日国際児童図書推進賞 2022 年の候補として、この団体を以下の理由で推薦していま

す。「"物語の織り手"では、子どもたちに"自分の声"を使うように働きかけている。ふだん、声を聴くことのできない子どもたちが、物語を語り創作することで、自分の声を聴き、社会における自分の居場所を得ることができるのだ」⁽¹⁷⁾

「翻訳者の家」での2週間の滞在を通して、私は本や紙芝居を通して伝わる人間愛を、日本にいたときよりさらに切実に感じました。そして、戦争や災害を逃れてこの地にきた大勢の子どもたちのこと、図書館の役割を、違う視点で考え始めています。

* ひこ田中氏発行「児童文学評論」No.313-1 2024/03/31号より一部編集して転載

- (1) <https://www.literatuurvlaanderen.be/vertalershuis/>（「フランダースの文学」とも呼ばれる）
- (2) <https://www.literatuurvlaanderen.be/>
- (3) <https://www.re-cit.org/>
- (4) <https://www.kamishibai-ikaja.com/activities/2019-11-europe.html>
- (5) <https://www.permeke.org/>
- (6) <https://www.permeke.org/jbm24/overzicht> なお日本の国際子ども図書館でも2021年に「スポーツと子どもの本」

の展示があった。<https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/tenji2021-01.html>

- (7) 『紙芝居を始めましょう Aan de slag met kamishibai』の著者 <https://eenhoorn.be/boek/aan-de-slag-met-kamishibai/>
- (8) <https://www.permeke.org/babel2023>
- (9) <https://www.iedereenleest.be/>
- (10) <https://www.iedereenleest.be/over-lezen/de-praktijk/bewegingstips-bij-prentenboeken#:~:text=door%20vragen%20te%20stellen%20over,blijft%20het%20veel%20betere%20hangen.>
- (11) <https://www.hyoronsha.co.jp/search/9784566080263/>
- (12) <https://www.iedereenleest.be/internationaal> IBBYとは、スイスのバーゼルに本部を置き、現在世界85の国や地域に支部を持つ「国際児童図書評議会」の略称。
- (13) <https://www.iedereenleest.be/contacteer-iedereen-leest>
- (14) <https://www.iedereenleest.be/opleiding-en-vorming>
- (15) [vlaanderen.be/onderwijs-en-vorming/zorgondersteuning-en-begeleiding-in-het-onderwijs/onderwijs-voor-leerlingen-met-specifieke-noden/onthaalonderwijs-voor-anderstalige-kinderen-okan](https://www.vlaanderen.be/onderwijs-en-vorming/zorgondersteuning-en-begeleiding-in-het-onderwijs/onderwijs-voor-leerlingen-met-specifieke-noden/onthaalonderwijs-voor-anderstalige-kinderen-okan)
- (16) <https://www.verhalenweverij.be/>
- (17) <https://www.ibby-nederland.nl/prijzen/ibby-asahi-reading-promotion-award/>

* * * * *

西欧絵画の革新と伝統～2024年渡仏・渡蘭の旅から

斎藤至

ことしの11月6日～13日、10年ぶりに渡欧しフランドル絵画や現代美術に接する機会を得ました。きっかけは甲府を拠点に活動する友人の音楽家・川口聖加さんのお誘いです。フランスでは彼女がソリストを務めるマドレーヌ教会公演の聴衆として、オランダではマスタークラスのピアノ伴奏者として行動しましたが、限られた自由時間でも密度高く傑作に接することができました。必ずしもベルギーと直結する専門的話題ではないですが、この機に紙面をお借りして旅を振り返りつつ、会員の皆様に話題を提供したいと思います。

パリの現代美術

パリで教会公演を聴き終えた翌日、一息入れて昼から地下鉄でポンピドゥー・センターへ行きました。ディジョンに駐在中の友人に薦められ「シュルレアリスム宣言」の発表から100周年の節目に企画された大規模な展示でした。全編はこの「宣言」を振り返るイメージビデオを序章に、キメラ（異質同体）や不思議の国のアリス、夜・エロス・宇宙などのモチーフごとに13の室に分かれて構成されています。ベルギー出身の画家マグリットをはじめ、デ＝キリコやエルンストの作品も洩れなく展示され印象的でした。個人的には、幻想的（象徴主義との境目に位置しそ

う)な作品までもが網羅されていることに、裾野と視座の広さを感じました。

もう一つの企画展はバンド・デシネの 60 年史。時間の都合で画集の購入に留まりましたが、日本からは葛飾北斎などの浮世絵にルーツを見つつ、手塚治虫の SF や、《孤独のグルメ》がヒットし 2011 年にシュバリエを受章した谷口ジローらを視野に収めています。日本で人気のある漫画のラインナップと異なる視点が垣間見えました。

フランドル絵画の伝統に接する

パリからユーロスターに乗って陸路で移動したデン・ハーグでは、2 日間のマスタークラスの後には短い市内観光ができました。同市の音楽院は古楽の世界的な拠点として著名ですが、マウリッツハイス王立美術館は、オラニエ=ナッサウ家傍系の貴族マウリッツの邸宅を改装し、フランドル絵画を所蔵しています。館は国会議事堂に隣接して湖のほとりに佇み、確かな存在感を放っています。全体は 3 階建ての各室に作品が余裕をもって配置され、レンブラントの自画像や《夜警》《解剖学の実験》などのほか、バロック期に影響を受けた天井画や、ルーベンスの《手燭に照らされた老婆と少年》など、知られざる名画も多く展示されていました。敢えて日曜日を外して訪れたにもかかわらず来訪者は多かったです。

これまでフランドル絵画というと、私はつましい綺麗さや、確かな写実に特徴を感じていました。ただ実際は、明暗のコントラストを活かした意外に劇的なキャラクターも感じられ、バロック期絵画の影響も濃いのかなと想像しました。

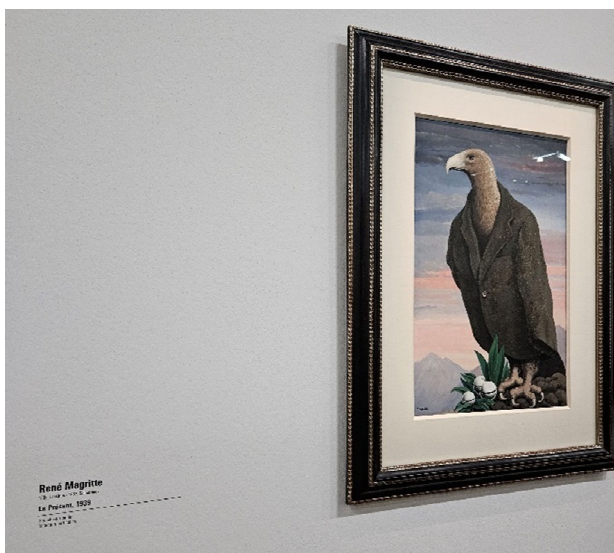
ドバイ乗継にて片道 20 時間の空の旅で、長距離乗物の苦手な私には辛抱を強いられました。とはいえ、この困難な時代に得難い息抜きの機会だったと振り返っています。

開催情報

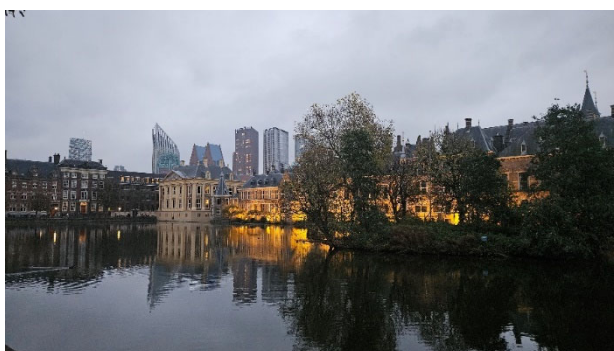
- ポンピドゥー・センター <https://www.centrepompidou.fr/fr/magazine/tag/expo-surrealisme>
- マウリッツハイス美術館 <https://www.mauritshuis.nl/jp/>



ポンピドゥー・センター外観。半透明のパイプ状エスカレーターで昇降する構造が先鋭的



マグリット《Présent (存在)》(1939 年)



マウリッツハイス美術館外観。奥に建ち並ぶ近代的な高層ビルとの対比は市内随一の見所



ベルギー王立美術館の館長を2005年以来18年間務めたミシェル・ドラゲ (Michel Draguet, 1964-) が昨年2023年4月末に三度目の任期満了をもって退任した。後任はその時点で決まっておらず、館長不在の一年超を経て、今年2024年7月にキム・オーステルリンク (Kim Oosterlinck) が新たな館長に就任した。スムーズとは言い難い館長交代の背景には何があったのか。その経緯を報告する。

発端は2022年12月、四度目の任期をドラゲ氏に託すかどうかの審査が行われるタイミングで、美術館職員ら176名のうち31名が公開書簡を発し、ドラゲ氏の運営に問題があると訴えたことにある。最初に報じたのは日刊紙『デ・スタンダールト (De Standaard)』(12月16日付)で、手紙の宛先は当時の科学政策担当国務大臣トマ・デルミヌ (Thomas Dermine) であり、手紙のコピーが政府の科学政策局 (BELSPO) の局長アルノー・ヴァジュダ (Arnaud Vajda) に送られた。連邦政府機関である王立美術館に理事会は存在しないため、この二人がドラゲ氏を評価し、任期の更新を決める立場にある。手紙では、ドラゲ氏の美術館運営に展望が欠けていることや、労働条件が劣悪であること、職員には非現実的な計画や目標が課せられ、ドラゲ氏の言動はしばしば人種差別的ないしは性差別的であり、威圧的で相手を侮辱するような態度を頻繁にとっていること等が報告された。こうした環境のせいで過去二年間に5名が離職、5名が解雇、6名が「燃え尽き症候群」に陥ったという。

この告発を受けて美術館はすぐに声明を出し、事態を重く受け止める姿勢を示すとともに、現状として人員が極端に少ないことや、業務量が増大している事実を認めた。美術館によれば、こうした現状は繰り返し行われてきた予算削減の結果であり、さらにはコロナ禍によって来場者を失うという、あらゆる文化施設に共通の財政状況によるものだという。声明からは歴代政権と美術館との間に少なからず不和のあったことが伝わってくるが、それについては後述する。美術館が声明を出してから数日後には各組合の代表を交えた協議会が設置され、実態把握の

ための内部調査が政府機関によって行われること、また、その結果はおおよそ半年後の2023年6月にまとめられる予定ということが明らかにされた。

それから数か月経ち、ドラゲ氏の任期満了が迫った4月にデルミヌ氏が発表したのは、ドラゲ氏は新たなポジションとしてBELSPOの遺産部門で主任研究員に就き、連邦政府コレクションの価値を高めるプロジェクト開発に携わるという人事であった。3月の時点でまとめられた調査結果では、告発文が指摘していたような差別に該当する事実は確認されなかったが、美術館運営が平穏を取り戻すよう、このような措置にしたという。こうして王立美術館では新館長が決まるまでの間、王立図書館長のサラ・ラメンス (Sara Lammens) が代理を務めることになり、その一年後、調査結果を踏まえた人事選考を経て、オーステルリンク氏が新館長に決まった。

就任前のオーステルリンク氏はブリュッセル自由大学 (ULB) の副学長として財政管理を担当し、経営学者として現在までソルヴェイ・ビジネス・スクール (2008年からULBに統合) 他で教鞭を執っている人物である——彼を推薦したと思われるデルミヌ氏は彼の教え子だ——。ただし専門は美術市場ということで、美術史と経済学の両分野に通じている。就任から3か月後に『デ・スタンダールト』(2024年10月2日付) が発表したインタビューで、氏は王立美術館が抱えている問題点として部署間の緊張関係を挙げている。これは財源が限られている教育機関に特有の傾向であるといい、氏としては部署どうしが美術館のために協力し合う風土をつくりたいと考えている。自らも予算配分など、すでに決定された事柄については職員にきちんと説明し、新たな展覧会の企画についてはトップダウンで進めず、学芸員たちに主導させたい意向を明らかにした。

オーステルリンク氏が踏まえているのは、ドラゲ氏によるトップダウンの運営が美術館内部に亀裂を生じさせただけでなく、それが広く大衆の反発をも引き起こしてきた事実である。どういうことか。

王立美術館は先述のとおり連邦政府の学術機関であり、ブリュッセルにある複数の美術館で構成され

ている。うち4つは“芸術の丘”にまとまって存在し、「古典美術館」「近代美術館」「マグリット美術館」「世紀末美術館」と、開設順に名前がついている。これにイクセル地区にある2つが加わり、それらは「ヴィールツ美術館」と「ムーニエ美術館」である。19世紀から20世紀にかけての美術を専門とするドラゲ氏は在任中にマグリット美術館(2009年～)と世紀末美術館(2013年～)を開設し、来場者数を大幅に増やすという実績を上げ評価されてきた。しかしその反面、彼は世紀末美術館を設置するために近代美術館から展示空間を奪い、2011年1月をもって近代美術館を閉鎖する“暴挙”に出てもいた。折しも前年の国政選挙以来、いつまで経っても新政権が発足しない政治的空白のさなかである。これが大きな批判を呼び、美術愛好家たちが美術館前でデモを行うなど抗議行動が広がった。ドラゲ氏の師でもあり二代前の館長であるフィリップ・ロベール＝ジョーンズ(Philippe Robert-Jones, 1924-2016)も、日刊紙『ラ・リーブル(*La Libre*)』(2013年11月13日付)の取材に答え、自身の在任中20年かけて1984年に開設した近代美術館が閉鎖されたことを残念に思い、解決策は他にあったはずだと述べている。ロベール＝ジョーンズ氏の時代に王立美術館の建物は大規模に拡張されたものの、アスベストのせいで今は立ち入り禁止になっている区域がある。本来であればその区域の改修工事を待って、そこに世紀末美術館を設置すべきであったと氏は主張する。

こうして美術館運営に対する批判が外から向けられる中、ドラゲ氏としては王立の美術・歴史博物館を擁する建国50周年記念公園内に新美術館を建て、近代美術館のコレクションを収める考えを持っていたらしい。が、複数の政治家が介入した結果、以下のようなシナリオが誕生した。すなわち、居場所を失ったコレクションを移設するために、ブリュッセル首都圏が運河沿いの再開発地区にある旧シトロエン・ガレージを購入し、美術館として改装した上で、パリのポンピドゥー・センターを運営主体に加えた新美術館を開設する。ただし土壌汚染の問題もあって整備には時間がかかるため、それを待つ間、ブリュッセル市が保有する建物エスパス・ファンデルボルフト(Espace Vanderborght)にコレクションを仮設して公開しようではないか、という案である。

ところが、このシナリオ作りには肝心のコレクション保有者である連邦政府が関わっておらず、2014年12月には当時の科学政策担当国務大臣エルケ・スルールス(Elke Sleurs)がドラゲ氏と対話を行わないまま、近代美術館コレクションの今後について、王立美術館内で元々展示されていた場所に戻す予定だと発表した。彼女によれば世紀末美術館こそが他の場所を見つけるべきであり、上記のシナリオは白紙撤回される。まさに混乱の極みである。それから二年後の2016年12月に、ドラゲ氏はスルールス氏を刑事告発。ドラゲ氏によればスルールス氏は、その上司に当たるBELSPO局長のルネ・デルクール(René Delcourt)と共謀して美術館運営を妨害し、ドラゲ氏に対して度重なるハラスメントを行ったという。こうした辛辣な応酬から垣間見えるのは、ベルギーの複雑な政治システムにおける意思決定の難しさだけではない。それ以上にあからさまなのは、ドラゲ氏の後ろ盾となっている社会党(PS)——フランス語圏の最大政党で、デルミヌ氏とヴァジュダ氏も所属——と、スルールス氏を始めとする新フランドレン同盟(N-VA)——2010年代前半に大躍進したオランダ語圏の最大政党で、フランドレンの分離独立を主張する——との確執である。美術館内部では部署間の分断に加え、どの政党を支持するかによっても分断が生じていたらしく、ベルギー国政の縮図のようだ。

ここまでに確認した経緯からして、少なくとも2011年の近代美術館の閉鎖以来、ドラゲ氏が連邦政府を無視して強引に物事を進めようとしたのはおそらく事実である。しかし、彼がそのような態度をとるに至ったのは、老朽化が著しい美術館の改修工事に必要な予算を与えるどころか、職場環境を悪化させるほどの予算削減を断行してきた連邦政府の責任であることもまた事実であろう。王立美術館ではアスベストの除去が完了して以降、その他の改修に必要な予算を与えられてこなかった。オーステルリンク氏を新館長に迎えた現在は、建国200周年となる2030年に向けて継続的な改修工事のための予算が組まれ、2026年から四年がかりの工事が始まるという。これによって展示空間は大幅に拡張されるようだが、そこに問題の近代美術館が収まるのかわかるとはまだわからない。

筆者はマグリット美術館が開設したばかりの2009年にULBに留学し、マグリットを研究する身としてドラゲ氏に師事した。とはいえ、館長として多忙を極める氏との面談はどの学生も15分が上限で、面談が行われる館長室はさながら患者が詰めかける病院の診察室のようであった。そんな訳で指導らしい指導は受けられなかったが、マグリットのこ

スを使ってマグリット美術館に日参する日々は至福であった。あれから15年。私の視野も少しは広がり、マグリットを理解するためにもベルギーの同時代の美術についてきちんと知りたいと思うようになった。近代美術館の運命から益々目が離せない次第である。

留学記 1987-1993年

平岡洋子

1987年秋に、アエロフロートでブリュッセルのザペンタム空港に着いた。パスポートコントロールに行こうと乗客の後を歩いていたら、突然若い男性が現れてこちらへどうぞというような仕草をした。そこにはすでに二人の若い男性が立っていて、私も加わり三人は件の男性に連れられ横の扉から外へ出てしまった。私は、パスポートコントロールへは行かなくて良いの？という感じがしたが、そのまま車で街なかへ向かった。思えば、日本のベルギー大使館に出した書類に、何日何時に〇〇の飛行機でブリュッセルへ着くと書いた気がする。この男性はしかし、良く私と分かって見つけたなと驚いた。そして私は、空港で誰かが待っているとは思ってもいなかったのに驚くとともに、政府留学生というのはこんなに特権的で、列に並んでパスポートを見せて入国許可を得る必要もないんだと思った。

三人はブリュッセルの事務所に連れていかれ書類を渡され何か書いて、その後は銀行で口座を作り、ホテルへ案内された。やっと解放されて自分の部屋で少し休んで部屋の外に出てみたら、例の二人の男性がどこかへ出かけようとしている。どこへ行くんですか？と聞くとULBだという。私もULBに留学するので、じゃ丁度良いし一緒に行かせてくださいと頼んで一緒に行った。Louise Louizaという電車の駅で降りて、市電に乗り換えた。Louise Louizaが駅の名前だと思った。後に、二言語表記だからこうなっているのであってフランス語ではLouiseという駅

だとわかった。このようにベルギーのことに無知な私はどこにULBがあるのかも知らないし、連れて行ってもらうのはとても好都合だった。でも飛行機でブリュッセルに着くとすぐに大学へ行くとはまじめな二人だなと感心した。二人は数学の専門で、ロシア人だった。彼らがアエロフロートで来たのも当然と納得した。

美術史考古学科の事務室でPaul Philippot先生にお会いしたいと言うと、今授業中でもう終わるころだから待っていてくださいと言われ、廊下で待っていたら先生がやってきた。自己紹介をして専門の話をすると、あなたはまだ授業を一回しか逃していないからと、授業に出るのが当たり前のような話をされた。これにも驚いた。私は、留学生というのは自分の研究テーマに沿って図書館や資料のありそうな美術館の資料室とかに行き自由なやり方だと思っていた。これでは毎週授業に来なければならない。

Philippot先生の授業はたくさんあって、月火水木土とほぼ毎日全部で六科目ある。すべて出るわけには行かないので、月水土の授業に出ることにした。

Philippot先生の講義は大変評価が高く人気だった。ULBにはTroisième Ageの受講生たちがいて美術史はどの授業にも来ていたが、特にPhilippot先生の授業はたくさんの方々が受講していた。教室の扉が開く前から詰めかけていて、私も必ずずいぶん前に来て待った。フランス語を聞き取るのに前の方に座らなければ聞こえないし、せめてしっかりとスクリー

ンが見えるところに居なければと毎回頑張った。
Troisième Ageのおばさま方おじさま方には助けられたこともある。

Philippot 先生は、廊下を歩くときも端っこを歩き、学生にも Bon jour も言わないしほとんど話さない。しかし授業になると前に乗り出してきて、熱を帯びた感じになる。知識や説明ばかりではなく、本人の問題意識に貫かれた内容の授業だった。日本の研究者が何かの本の巻末の参考文献一覧に Paul Philippot を出しているが、そこには彼のことを「偉才」と記している。「偉才」とは驚きの言葉だが、そんな感じがしなくもない。水曜日の授業は 17 世紀絵画から 1830 年まで、革命期のフランス絵画までを取り扱ったものだった。

この授業の試験は私も受けた。美術史の試験はすべて口述試験だ。試験日は、〇〇日に受ける人という具合に日にち毎に名前が張り出されて、その日に先生の部屋の前で待って一人ずつ部屋に入り、質問を出されて答えるやり方だ。私はその頃には友達ができいて、その子はクラスで一番できる子のノートを借りてきて、二人でノートをタイプに打ってくれる人のところに持っていった。なにしろそのできる子の字がとても読みにくいので。タイプ打ちをしてくれた人は良く読めたなと思う。それに難しい内容なのに。その人はイスラム圏から来た人の子供かなと思われる若い人だった。段の真ん中が各段ごとに壊れた階段を、破れたところを避けながら上ったところの部屋に住んでいて、部屋には水がバケツに入れて置いてあり、若い女の人が子供といた。この

夫婦はティーンエイジャーに見えた。タイプ打ちの仕事で食べているんだろうが、私は、部屋も水もおそらく電気も何もかもただで暮らしているんじゃないかと思った。試験準備に私は、図書館で図版をコピーして先生が示した図をすべて集めて先生が指して説明したところに印をつけ、内容を書いていった。ノートはほとんど覚えてしまった。ベルギー人の学生たちはこの時期、八科目くらい試験を受けるので、次から次へと勉強しなければならないが、私はこの一科目だけだから十分時間をかけて準備できた。それゆえ試験の結果は良かった。これならやれると思った。

Philippot 先生の講義は私に響くものがあった。ある日、18 世紀末から 19 世紀のフランス絵画とドイツ絵画を比べて見せ、物を見ているかどうかを比較してみせた。ドイツの絵画は、物を見ているとは思えないように見えた。私はかつて、主体の在り様によって周囲の世界が異なって見えるという経験をしたことがあったので、絵画作品を見る場合でも画家がどのように世界を見ているかを問うという視点をもつことになり、問題意識を共有できる Philippot 先生の授業を全部受けようかなと思った。それなら、学部で美術史をやっていない私は ULB の学部で美術史をやろうかなと思った。長く滞在するなら正規の学生でなければ滞在許可は出ないし、滞在許可がなければアパートも借りられないということで、毎年各学年の試験をクリアして進んでいかねばならなくなった。



会員の刊行物

パパがしげみになった日

ヨーケ・ファン・レーウェン 作、野坂悦子 訳 岡本よしろう 絵

ほるぷ出版、2023 年 12 月刊

定価 1,540 円 (税込)

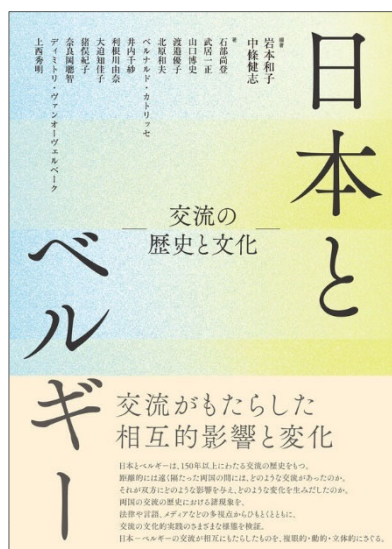
ISBN 978-4593103928

アントウェルペン在住の作家、ヨーケ・ファン・レーウェンが手がけた物語。戦争が起きて、お菓子屋さんのパパも兵隊として「しげみ」に変装することになり、主人公のトダはバスでひとり、となりの国に住むママのもとへむかう。でも「国境」を越えるのは、思ったよりずっと大変……。くすくす笑えて時にハッと胸を刺される、難民の意味を問いかけるお話。現代を生きる子どもにはもちろん、大人にも読んでもらいたい一冊。

<https://www.holp-pub.co.jp/book/b637978.html>



* * * * *



日本とベルギー——交流の歴史と文化

岩本和子・中條健志編

国書刊行会、2023 年 12 月刊

定価 2,800 円 + 税、ISBN 978-4-87984-447-7

日本とベルギーは、150 年以上にわたる交流の歴史をもつ。距離的には遠く隔たった両国の間には、どのような交流があったのか。それが双方にどのような影響を与え、どのような変化を生み出したのか。

両国の交流の歴史における諸現象を、法律や言語、メディアなどの多視点からひもとくとともに、交流の文化的実践のさまざまな様態を検証。日本ーベルギーの交流が相互にもたらしたものを、複眼的・動的・立体的にさぐる。



ベルギー研究会への入会について

ベルギー研究会に入会をご希望の方は、以下の URL から入会申し込みをお願いいたします。フォームを受信し入力内容を確認次第、担当者よりメールでご連絡いたします。

<https://forms.gle/ow5W6aCBsn1HVbzQA>

問い合わせ先 井内千紗 (chisa.inouchi@gmail.com)



ベルギー研究会会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第 9 号

発行 2024 年 11 月

編集 石部尚登

事務局 神戸大学大学院国際文化学研究科岩本研究室

サイト <http://www40.atwiki.jp/kbek/>



ベルギー研究会

Japanse vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien

Japanse vereniging voor de studie van Belg

Japanese Association
for the Study of Belgium
Association des belges
étudiants japonais
für Belgische
Studien